Nathan der Weise

『賢者ナータン』人物相関図

図と文：森和雄と田中孝弥

時と場所：12世紀末のエルサレム

イスラム教

父
レバノンにいる。

ゆけ！ ゆくがいい！
だが、私の友になってくれ。

兄

サラディン：浅雛拓
イスラム国家の君主。心優しい人物。
お金に困っている。

妹

シッタ：小笠原聡
好奇心旺盛。

主従

金庫番

アル・ハーフィ：得田晃子
イスラム教の托鉢僧、粗野で高貴な人物。

友人

キリスト教

主従

弟

アサッド
＝ヴォルフ・フォン・フィルネク
キリスト教に改宗。故人。

シュタウフェン家

妹
故人・ドイツ人。

兄
コンラート・フォン・シュタウフェン
故人・ドイツ人。神殿騎士を育てた。

養育

友人

ユダヤ教

お父様、ご存じの通り、
私は自分が間違っていた場合、
間違いをそのままにしておくのは
嫌いです。

他の宗教よりも優れた神を
持っている、だからこの優れた神を
人類最高の神として、
全世界に押しつけるのだという、
信心深い空想は、この上なく
醜悪な姿をさらしています。

ユダヤ人の豪商

ナータン：林英世

養育

ナータンの娘（妹）

レヒャ：泉希衣子
火事の中、神殿騎士に助け出される。
本当はユダヤ人ではない。

恋愛関係

神殿騎士（兄）

クルト・フォン・シュタウフェン：高口真吾
（偽名：クルト・フォン・シュタウフェン）（本名：ロイ・フォン・フィルネク）
サラディンに命を救われ、恩義を感じている。

キリスト教徒やユダヤ教徒は、
人間である以前にキリスト教徒であり、
ユダヤ教徒なのでしょうか？
ああ！ 人間であるだけで十分だという同志が、
もう一人増えたとすると、
大変ありがたいのですが。

主従

ナータンの侍女

ダーヤ：西田政彦
敬虔なキリスト教徒。レヒャを
キリスト教徒らしく育てようとする。

大司教

得田晃子
権威主義の俗物。

主従

修道士

や乃えいじ
他人と関わりたくないと思っている。
フィルネクの元馬丁。かつて、レヒャ
をナータンに届けた。

●できごとの流れ

20数年前
- ●アサッド（サラディンの弟）失踪。ドイツ人女性とヨーロッパへ。ヴォルフ・フォン・フィルネクと名乗る。
- ●ロイ・フォン・フィルネク（のちの神殿騎士）が生まれる。
- ●ヴォルフ（アサッド）は、神殿騎士団の一員として妻と共にパレスチナへ赴く。ロイ（のちの神殿騎士）はドイツに残され、妻の兄、コンラート・フォン・シュタウフェンに育てられる。

18年前
- ●ヴォルフ（アサッド）の子供、レヒャがパレスチナで生まれる。
- ●レヒャの母親が亡くなる。
- ●ナータン、妻と子供7人をキリスト教徒に焼き殺される。
- ●ヴォルフ出征に際し、馬丁（のちの修道士）がレヒャをナータンの元へ届ける。
- ●ヴォルフ（アサッド）が、アスカロンで戦死。

14年前頃？
- ●ダーヤ、夫と共にパレスチナへ向かう。
- ●ダーヤの夫、皇帝と共に川で溺れ死ぬ。
- ●ダーヤ、ナータンの侍女として働く。（レヒャの養育係）

現在
- ●ヨーロッパから新たな十字軍が攻めてくる。
- ●サラディン、十字軍と休戦条約を結ぶが、小競り合いは度々起こっている。
- ●神殿騎士、テプニンで捕虜になり、サラディンの恩赦によって、命を救われる。
- ●ナータンの家が火事になり、レヒャは神殿騎士によって、助け出される。

歌1 空爆

あの日、多くの命が奪われた。
事件を起こした連中は、確かにこの国に生まれた。
でも、あの顔をよく見てごらん。
ヤツらはこの国の人間じゃない。ボクらの隣に野蛮人がいる。
水平線の向こうに追い払い、ボクらはヤツらに空爆する。
悪魔は、いつもボクらの外にいる。

―君が今、その手のひらにあるスイッチを押したのか？

歌2 寛容

真っ黒な煙が立ち上がり、助けを求める人びとの声が聞こえる。
もう何も言わなくていい。
君が震えていることは分かっているから。
それでも他人の過ちをボクらは互いに、咎（とが）めず、許し合う。
さあ、見上げてごらん。
黒い煙を抜けたその先の、空はやはり美しい。
確かに今、ボクらは大きな試練に立っている。
それでもやはり、……人生は美しい。

レッシングの『賢者ナータン』について

『賢者ナータン』はドイツ啓蒙主義を代表する作家、ゴットホルト・エフライム・レッシング（1729-1781）が、1779年に書いた戯曲だ。啓蒙思想・啓蒙主義は、ヨーロッパで17世紀末に起こり、18世紀に全盛になった革新的思想である。中世以来のキリスト教会によって代表される伝統的権威や旧来の迷信・因習などを理性によって批判し、不合理なものへの従属から脱却して人間の自由と幸福を獲得することを目指す思潮である。ドイツではレッシングなどに代表され、フランス革命の原動力の一つになった。

レッシングは1770年5月に初めて定職を得、ブラウンシュヴァイク大公国にあるヴォルフェンビュッテルの図書館の司書職に就いた。『賢者ナータン』はこの時代に、キリストの神性をめぐるハンブルクの牧師ゲーツェとの大論争が契機となってできた。ブラウンシュヴァイクの官憲は旗色が悪くなった正統派の威嚇に屈し、レッシングに筆を折ることを命じた。論争文の出版禁止令を受けたレッシングは別の演壇から民衆に向かって呼びかけるしかなく、最後の大作『賢者ナータン』で舞台上から論争を継続した。

レッシングは晩年、大きな不幸に遭遇する。1776年に友人の未亡人だったエーファと結婚するものの、翌年に難産で生まれた息子と妻を失う。ナータンは18年前にキリスト教徒によるテロ行為・襲撃により、妻と七人の息子を虐殺されている。「キリスト教徒に対して永遠の憎悪を誓う」が、「理性を取り戻し」、キリスト教徒の赤ちゃんを引き取り、失った子ども七人分の愛を注いだ。ホロコースト、南京大虐殺や中国残留孤児のことが頭をよぎった。中国には虐殺者の子どもを育てたナータンのような人が多くいたのだろう。

『賢者ナータン』はキリスト教徒とイスラム教徒とが激しく争う一二世紀末の聖地エルサレムが舞台になっている。第３幕第７場で、イスラム教国の王サラディンは、ユダヤ人の裕福な商人ナータンからお金をせびり取ろうとして難問をふっかける。「ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三つの宗教のうち、ほんものの宗教はどれか」というのである。賢者ナータンは『指輪の寓話』を用いて、難局を切り抜ける。昔、東方のある家に不思議な力を持つ指輪が代々伝わっていた。それを持つ者は神にも人にも愛されるという。指輪は幾世代に渡って最愛の息子に受け継がれ、三人の息子を持つ父親の代になる。息子を同じように愛する父親は、本物そっくりの指輪を二つ作らせ三人に与えた。父の死後、争いになり法廷で決着がつけられることになる。ナータンは裁判官に次のように言わせる。「本物の指輪にはその持ち主が神からも人からも愛されるという不思議な力があるのだから、その力が発揮されるようそれぞれ励みなさい」と。三つの指輪はもちろん三つの宗教の比喩であり、レッシングは寓話によって、問題はどの宗教が真正であるかではなく、いかに実践するかにあると説いたのだ。人間は宗教的な偏見を離れて、実践的な愛に生きるべきだという人類愛と寛容の精神が、ここでは謳われている。理性と善意による和解が示され、二人の間には思想・信仰を越えた友情が芽生える。この寓話はボッカチオの『デカメロン』から取られている。「本物か決定されないまま今日に及んでいる」というボッカチオの話に対して、レッシングでは指輪の真贋を離れて、人間の心・行動に話が移され、明るい笑いに満ちた解決が用意されている。

最終場では、レヒャと騎士は実の兄妹で、父親は失踪したサラディンの弟アサッドだったことがわかる。サラディンとシッタから見れば、二人は甥と姪に当たる。そして血のつながりはないが彼らはみなナータンとは精神的な親族である。すべてが抱擁を交わすうち幕となる。現在上演中のＡ・クリーゲンブルク演出の『賢者ナータン』（ベルリンのドイツ劇場）では、舞台に登場する俳優はみなほぼ裸で、全身に泥を塗りたくり、人物の区別もほとんどつかない。「ああ、そうだ！　人間は生まれたときは性の区別を除き、宗教や民族や服装の区別もなく、みな同じだったのだ」。演出の意図が伝わってくる舞台だった。

演出の田中孝弥、ナータン役の林英世をはじめ、この大作に取り組む姿勢には打たれる。すごい勉強と努力なのだ。日本でほとんど上演機会がない作品の上演に期待が膨らむ。

――――市川　明

音楽・演奏：仙波宏文　特別協力：森和雄・大野亜希